

インタビュー

職種を超えて仕事のできる若手を育成し、文化として育てる

(株)Euclid 代表取締役 白石普氏／(株)高山煉瓦建築デザイン 代表取締役 高山登志彦氏

11月7日から9日の3日間、愛知県名古屋市の岡谷鋼機名古屋公会堂を会場にタイルの祭典「CERASTA 2025」が開催された。テーマは「タイルの本質に立ち返り、タイルの魅力を伝播し、正しいタイル文化を築き、多くの人たちの暮らしを豊かにすること」、国産タイルが作られてから100年、いかにしてタイルを文化へと昇華させるか。そして、今回は初めて日本れんが協会の協賛も得て開催されることとなった。

本稿ではCERASTA2025の開催から見てくるタイルと煉瓦の現在地と未来展望について白石普氏(株)Euclid)、高山登志彦氏(株)高山煉瓦建築デザイン)の2人に話を伺った。(編集部)

業界人の手で盛り上げる祭典を

今回のCERASTAでは煉瓦業界との共催という形でしたが、経緯について教えて下さい――

白石：昨年のCERASTA2024の座談会で煉瓦の高山さんと左官の久住有生さんに登壇してもらい、その時に高山さんからタイル業界は盛り上がっていて良いねと言ってもらいました。今年は愛知県で開催することもあって煉瓦メーカーも多く、土を素材とする焼き物同士なので一緒にやれないかと話をしていました。

高山：白石さんとは友人でもあります。私自身としてもクリエイターとして、何か世間に伝えることができればと、昨年のCERASTAには個人的に参加したのですが、こうしたイベントは同じ想いの仲間を集める力があると感じました。ちょうど日本れんが協会の総会でも煉瓦をもっとアピールしていかなければという話が出ていて、同じタイミングで白石さんから今回は煉瓦業界を巻き込みたいという話をもらって、それを協会に持ちかけたところトントン拍子に話が進んでいきました。良いタイミングだったと思



▲「子供たちの世代へ伝えるためにも、今の30代の職人を育てなければ」と語る高山さん(左)と白石さん(右)



▲ CERASTA 2025 の会場は岡谷鋼機名古屋公会堂

います。

特に若い世代は喜んでいて、これまで建築建材展などの大規模イベントで協会のブースを出展していましたが、それほど手応えがなかった。ただ、煉瓦業界全体としてはPRの場というのは必要だと考えていて、それが今回のCERASTAでPRにつながる展示ができたことは良かったと思います。それに、CERASTAは全て業界の人達だけで運営をしている。とくに昨年の平田タイルさん、今年の協和建材さんと業界の基幹を支えてきた会社がイベントの緑の下の力持ちとなってボランティアで協力して盛り上げていました。